

ダニエルの書 - ナンバー・テン

プロセス

Jeff Pippenger

2023-12-05

ダニエル書1章で、ダニエルはエレミヤが預言した七十年の捕囚に連れて行かれ、クロスの第一年まで続いた。

こうして、ダニエルはキュロス王の第一年まで仕え続けた。ダニエル書 1:21

こうして、ダニエルは、エルサレムを再建し回復するために古代イスラエルの帰還を許可する布告が出されるまで、捕囚七十年の全期間を生き抜いた。

ペルシアの王クロスの第一年に、主がエレミヤの口を通して語られたことばが成就するように、主はペルシアの王クロスの霊を奮い立たせ、彼は王国全土に布告を出し、またそれを文書にも記して、こう告げた。エズラ記 1:1。

したがって、ダニエルは、2001年9月11日に始まり、バビロンから出るようにとの召しを告げる「布告」に至るまで続く、十四万四千人の試練の過程の象徴である。

また、天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女のもとから出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女に下る災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を思い起こされた。」黙示録 18:4, 5。

七十年の捕囚は、十四万四千人の試練と清めの期間である。2001年9月11日、イスラムの第三の災いが到来した。これは、アドベンチズムの基礎的な真理を受け入れる者にしか認識されない。第一の災いと第二の災いは、先駆者たちによっていずれもイスラムであると正しく特定された。エレン・ホワイトが支持し、ハバクク書2章の成就とされる1843年と1850年の先駆者たちの図表の両方で、イスラムは第五と第六のラッパとして示されている。最後の三つのラッパは災いのラッパである。

そして私は見た。また、天の中空を飛ぶ一人の天使が大声でこう言うのを聞いた。「災いだ、災いだ、災いだ。地に住む者たちに、これから吹き鳴らされる三人の天使のラッパの残りの響きのゆえに！」黙示録 8章13節。

災いのラッパが三つあり、第一と第二の災いのラッパがイスラム教であるなら、第三の災いのラッパもまたイスラム教であると認識するのはきわめて簡単である。イスラム教を災いのラッパとして示す象徴の一要素は、抑制されていること、そしてそれが解き放たれる時である。ホワイト姉妹は、黙示録7章の四つの風を「怒れる馬」、すなわち「解き放たれようとし」「その跡に死と破壊をもたらす」ものとして捉えている。

天使たちは四方の風を押さえている。それは、つなぎを断ち切って全地を駆け抜け、その行く先々に破壊と死をもたらそうとする怒れる馬として表されている。

「私たちは、永遠の世界のまさに目前で眠っていてよいのだろうか。私たちは鈍麻し、冷え切り、死んでいてよいのか。ああ、私たちの教会において、神の御霊と御息が

その民に吹き込まれ、彼らが自らの足で立ち上がり、生きようになればよいのに、私たちは、その道は狭く、その門は狭いことを悟らねばならない。しかし、私たちがその狭い門を通り抜けるとき、その広がりには限りがない。」Manuscript Releases, 第20巻, 217頁。

四つの風を抑えている四人の天使は、死と破壊をもたらす聖書の預言の「怒れる馬」を抑え込んでいる。第一と第二の「災いのラッパ」が示されている黙示録第九章では、一人の王が特定されている。彼は黙示録の「九章十一節」で特定されている。

彼らの上には王がいて、それは底なしの淵の天使であり、その名はヘブル語でアバドン、ギリシア語ではアポリオンと呼ばれる。彼らの上にいる者として、黙示録9章11節。

イスラムの王の名、したがってその性質は、ヘブライ語ではアバドン、ギリシア語ではアポリオンである。旧約聖書（ヘブライ語）と新約聖書（ギリシア語）の双方において、これら二つの名の定義の中にイスラムの性質が見いだされる。いずれの語でも、その定義は「死と滅び」である。ホワイト夫人は、十四万四千人に封印が押されている間、四人の天使が抑えている「怒れる馬」が、解き放たれようとし、その進むところに「死と滅び」をもたらそうとしていると言う。

聖書におけるイスラムへの最初の言及は、イスラム教を奉じる者たちの父であるイシュマエルである。その最初の言及では、彼は野生の人とされており、そこでは「野生」と訳されている語が「野生のアラビアのろば」を意味する。イスラムに関する最初の預言的言及は馬科の象徴であり、先駆者たちは二つの神聖な図表の上で、第一と第二のわざわいにおけるイスラムを馬で表した。黙示録7章の四つの風は、神がご自分の民に封印を施されるまで、抑えられており、すなわち「抑制されている」。十四万四千人の封印の過程は、同時に試練の過程であり、清めの過程でもある。

これらすべての預言的な例証は、第一のメッセージに力を与えることの象徴であるエホヤキムから始まり、男女をバビロンから呼び出す「勅令」に至るまで、ダニエルの七十年に及ぶ捕囚によって表されている。イスラムが抑えられ、そして解き放たれるという事柄は、聖書の預言における象徴としてのイスラムの預言的特性である。

それらが「四つの風」と呼ばれるとき、神のしもべたちに印が押されている間、それらは押しとどめられている。第二のわざわいの初めに、1840年8月11日に成就した391年と15日の時の預言において、第二のわざわいにおけるイスラムを象徴する四人の天使が「解き放たれた」。預言の終わりには、彼らは「押しとどめられた」。

ラッパを持つ第六の御使いに言った。「大いなるユーフラテス川に縛られている四人の御使いを解き放て。」そして、その四人の御使いは解き放たれた。彼らは、人間の三分の一を殺すために、その時、その日、その月、その年のために備えられていた。黙示録 9:14、15

2001年9月11日、第三の災いのイスラムが「解き放たれた」とき、十四万四千の歴史における最初のメッセージに力が与えられた。だがそれは直ちに「抑制された」。なぜこうなったのかはホワイト姉妹が説明しているが、その前に、聖書におけるイスラムへの最初の言及の目的は諸国民を怒らせることであり、イシマエルの手はすべての人に逆らい、

すべての人の手はイスラムに逆らうからであることを思い起こすべきである。

主の御使いは彼女に言った。「見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産む。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれたからである。彼は荒々しい人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手も彼に逆らう。彼はすべての兄弟たちに向かい合って住むであろう。」創世記16:11、12。

聖書の預言におけるイスラムの目的は、国連が安息日を守る者たちに怒りを向ける前段階として、すべての国々をイスラムに対して団結させることである。2001年9月11日、9/11がミラー派の出来事の連鎖の再現の始まりを告げるものだと理解するすべての人は、七十年間バビロンに連れて行かれたときの「ダニエル」と同じ立場になった。エホヤキムはその試練の過程の開始点を示し、そのとき第三の災いとしてのイスラムが解き放たれたが、神がご自分の民に印を押すことができるよう、直ちに抑え込まれた。

この見解は1847年に与えられたもので、その当時、安息日を守っている再臨派の同胞はごくわずかであり、そのうちのさらに少数しか、その遵守が神の民と不信者との間に一線を画するのに十分な重要性をもつとは考えていなかった。今やその見解の成就が見え始めている。ここで言及されている「その艱難の時の始まり」は、災いが注がれ始める時を指すのではなく、キリストが聖所におられる間に、それらが注がれる直前の短い期間を指している。その時、救いの働きが終結に向かう一方で、地上には苦難が訪れ、諸国民は怒るが、第三天使の働きを妨げないように抑えられる。その時、「後の雨」、すなわち主の御前からの潤いが来て、第三天使の大いなる叫びに力を与え、七つの最後の災いが注がれる時期に立ち得るように聖徒たちを備えるであろう。『初期の著作』、85。

ダニエルの七十年は、2001年9月11日、イスラムが解き放たれて黙示録十三章の地から上ってくる獣を突然かつ不意に打ち、諸国を怒らせたときに始まった。その後、イスラムは抑えられ、第三の天使の働きが成し遂げられるようになった。第三の天使の働きとは神の民に封印を施すことであり、その働きが2001年9月11日に始まったとき、後の雨が「ぱらつき」始めた。ダニエル書一章は、十四万四千人の試練の過程を描写しており、それは2001年9月11日に始まり、黙示録十八章の第二の「声」が神のもう一つの群れをバビロンから呼び出すまで続く。ゆえにダニエルは、試練の過程が最終的に完結するまで、いま霊的な捕囚の中にある民を表している。ダニエル書一章における試練の期間の結末は、「日数の終わり」として示されている。

さて、王が彼らを連れて来るように命じた日数が満ちると、宦官の長は彼らをネブカドネザルの前に連れて行った。王は彼らと語り合ったが、その中で、ダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤに並ぶ者は一人もいなかった。こうして彼らは王の前に仕えることになった。王が彼らに知恵と理解に関して尋ねたあらゆる事柄において、彼は、王の全領内にいたすべての呪術師や占星術師に比べて彼らが十倍も優れているのを見いだした。ダニエル書 1:18-20。

ダニエルと三人の忠実な者たちにとって預言的な試金石となる第三の試練は、彼らがネブカドネザル王の審査を受け、王の全領内にいたすべての魔術師や占星術師よりも「十倍優れている」と認められたときであった。第三の試練は裁きを象徴しており、その裁き

は「日数の終わり」に起こった。ダニエル書において「日数の終わり」とは、ダニエルが自分の受ける分に立つ時のことである。

多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者はなおも悪を行い、悪しき者のうちには悟る者はいない。だが、賢い者は悟る……。待ち望み、千三百三十五日に達する者は幸いである。だがあなたは（ダニエルよ）、終わりが来るまで自分の道を行け。あなたは休み、終わりの日にあなたの受ける分に立つであろう。

ダニエルが自らに定められた持ち場に立つべき時が来た。彼に与えられた光が、かつてないほどに世界に広まるべき時が来た。主が多くのことをしてくださった人々がその光のうちに歩むなら、この地上の歴史が終わりに近づくとつれて、キリストと彼に関する預言についての彼らの知識は大いに増し加えられるだろう。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第4巻、1174頁。

ホワイト姉妹は、「日々の終わり」をダニエル書12章10節の清めの過程と結びつけている。彼女はしばしば、13節の「日々の終わり」とともに10節を用いる。

多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者はなおも悪を行い、悪しき者のうちには悟る者はいない。だが、賢い者は悟る……。待ち望み、千三百三十五日に達する者は幸いである。だがあなたは（ダニエルよ）、終わりが来るまで自分の道を行け。あなたは休み、終わりの日にあなたの受ける分に立つであろう。

ダニエルは今日、定められた持ち場に立っており、私たちは、彼が人々に語るための場を与えなければならない。私たちのメッセージは、燃え輝く灯のように世に出て行かななければならない。「その時、あなたの民の子らのために立っている大なる君、ミカエルが立ち上がる。そして、国があって以来その時まで、かつてなかったような苦難の時が来る。その時、あなたの民は救われる。書に記されている者は皆、地の塵の中で眠っている多くの者が目を覚まし、ある者は永遠の命に、ある者は恥と永遠の蔑みに至る。知恵ある者は大空の輝きのように輝き、多くの者を義に導く者は、世々限りなく星のように輝く。」

これらの言葉は、この終わりの時代に私たちがなすべき働きを示している。私たちは半分も目覚めていない。なすべき働きを行うのに不可欠な力を、私たちは持っていない。私たちは命に生き、一致しなければならない。今、まさに今、悔い改めと赦しが私たちの働きの顕著な特色となるような立場に立たなければならない。争ってはならない。人の目をくらすサタンの業に関わるには、もう遅すぎる。惑わす霊や悪魔の教えに耳を傾けるには、もう遅すぎる。

私は次のように言うように指示を受けています。聖霊が言葉と語る力を与えられるとき、私たちはペンテコステの日に行われたのと同様の働きがなされるのを見るでしょう。キリストの代表者たちは賢明に働きます。打ち壊し滅ぼそうとする者が、ここに一人、あそこにまた一人と見いだされることはありません。

「定めが下される前に、日がもみがるのように過ぎ去る前に、主の激しい怒りがあなたがたに臨む前に、主の怒りの日があなたがたに臨む前に、主を求めよ。地のすべての柔和な者たちよ、主の裁きを行ってきた者たちよ。義を求め、柔和を求めよ。おそらく主の怒りの日にあなたがたは隠されるであろう。」オーストラリア連合会記録、190

7年3月11日.

バビロンでのダニエルの捕囚の七十年によって象徴される十四万四千人の封印は、ダニエル書十二章十節にも表されている。その節は「真理」の印を帯びており、ヘブライ語の「真理」という語の特性である三つの段階を示している。「多くの者は清められ、白くされ、そして試される。」ダニエルと三人の勇士は、第一章において、バビロンの食物を食べないと決心したため、神への畏れによって清められた。彼らはその後、バビロンの食物を食べた者たちよりも、顔色はより美しく、肉付きも良くなっていることを示した。彼らの容貌は、白い衣であるキリストの義であった。そして日数の終わりに、ネブカドネザルの裁きを受けるとき、彼らは試された。

「日々の終わり」に、ダニエルが「自分の分に立つ」とき、神の民にとって、「キリストについての知識と彼に関する預言についての知識が大いに増し加えられる」。ネブカドネザルは、「知恵と理解に関するあらゆる事柄において」、ダニエルと三人の勇士は「彼の全領内にいたすべての魔術師や占星術師よりも十倍すぐれている」と「見いだされた」と述べた。」

ダニエル書第1章は、三段階の試練の過程を通る十四万四千人の経験を描写しています。その過程について言及して、ホワイト姉妹はこう述べています。「これらの言葉は、私たちがこの終わりの時代に行くべき働きを示しています。私たちは半分も目覚めていません。私たちは、なされなければならない働きを行うために不可欠な力を持っていません。私たちはいのちに入り、一致に入らなければなりません。今、まさに今、私たちは、悔い改めと赦しが私たちの働きの際立った特色となる、その立場に立たなければなりません。争いがあるはなりません。」

「日々の終わり」へと至る試練の過程は、黙示録11章における二人の証人の復活へとつながっている。今私たちがなすべき働きは、2001年9月11日のメッセージを受け入れ、干からびた骨に象徴されているように目を覚ますことである。「私たちは生き返り、一つにならなければならない。」これを行うとき、私たちの働きの際立った特徴は「悔い改めと赦し」となる。私たちの働きの際立った特徴は、ダニエル書9章において、彼がレビ記26章の祈りをささげ、自分の罪と父祖の罪の赦しを願い、さらに2020年7月18日に「待機の時」の始まりを画した失望以来、自分が神に逆らって歩んでいたことを認める姿によって表されている。また同じ期間、神が自分に対して逆らって歩んでおられたことも認めなければならない。ダニエルは、2020年7月18日以来、「七十年」の捕囚を通過してきた者たちを表している。

七十年は、レビ記二十六章の「七倍」の象徴である。歴代誌によれば、その七十年は、その地が、古代イスラエルがレビ記二十五章の契約に背いたために享受できなかった安息年を「楽しむ」ための期間であった。

エレミヤの口を通して語られた主の言葉を成就させるため、地がその安息を享受するまで、すなわち地が荒れ果てている間は安息を守り、七十年を満たすためであった。
歴代誌下 36:21

預言的な「荒れ野」の象徴として、2020年7月18日以降に黙示録11章の二人の証人が通りで死んでいた「三日半」は、「七十年」の象徴であり、また「七つの時」の象徴でもある。「日々の終わり」とは、ダニエル書に封じられていた預言的な日数の終わりを象徴している。

1798年、ダニエル書の封印が解かれ、ダニエルは自らに割り当てられた場に立ち、目的を果たす準備が整っていた。

「神が人に特別な働きを委ねられるとき、その人はダニエルがそうしたように、定められた分と持ち場に立ち、神の召しに応えるべく備え、御旨を成就するべく備えていなければならない。」『原稿集』第6巻、108ページ。

1844年10月22日、ダニエル書第8章14節が成就し、ダニエル書は再びその所定の位置に立った。1798年と1844年は、第一と第二の忿怒の結末であり、したがって「七つの時」の終わりを画する年である。ダニエル書における「日々の終わり」は、「七つの時」によって表される捕囚の終結を象徴している。ダニエル書第4章では、「七つの時」が彼の上を過ぎる間、ネブカドネザルは獣のように生きた。「日々の終わり」になると、彼の王権と正気は彼に回復された。

日数が満ちたとき、私ネブカドネザルは天を仰ぎ見た。すると私の悟りが私に戻り、いと高き方をほめたたえ、永遠に生きておられる方を賛美し、その方に栄誉を帰した。その主権はとこしえの主権、その御国は代々に至る。地に住むすべての者は無きものと見なされ、天の軍勢に対しても地の住む者の間でも、主はみ旨のままに行われる。誰もその御手をとどめることはできず、またその方に「あなたは何をなさるのか」と言う者もない。同じ時に、私の悟りは私に戻った。私の王国の栄華は回復し、私の尊厳と輝きも私に戻った。私の参議たちと貴族たちは私を求め、私は私の王国に固く立てられ、さらに大いなる威厳が私に加えられた。ダニエル書 4:34-36

十四万四千人の封印の期間の終わりは「終わりの日」として表され、したがって「七十年」の象徴的な結末であり、また「七つの時」の象徴的な結末でもある。その時には、「悔い改めと赦し」が、かつて干からびた骨の谷を貫く街路で死んでいた者たちの働きを表す特徴となる。

十四万四千人の悔い改めの働きの目に見える特徴は、エゼキエル書第九章において「嘆き、泣き叫ぶこと」として表されている。神の民が自分の個人的な罪を告白して捨て去り、父祖たちの犯したのと同じ罪を自分たちも繰り返してきたことを認め、自説への誇りを捨てて自分たちが神に背いて歩んできたこと、さらに2020年7月18日に待機の時が到来して以来、神も彼らに背いて歩んでこられたことを認めるとき、彼らはそのとき、王国にいる他のすべての自称する賢者たちにまさる「十倍」の預言的な力を持っていることが明らかになる。

封印の過程は、イスラムがまず解き放たれ、その後抑制されることから始まった。その過程は始まったときと同じように、イスラムが再び解き放たれるときに終わる。イスラムは封印の時の終わりに解き放たれる。ダニエルにとってその終わりは、人々をバビロンから呼び出したキュロスの勅令であった。そこ、すなわち清めの日々の終わり、アメリカ合衆国における日曜法の「勅令」の裁きにおいて、忠実な者たちが「十倍の」預言的な力を有

していることが見いだされる。

「あなたがたは主の再臨をあまりにも先のことと考えすぎている。私は、後の雨が真夜中の叫びのように[突然に]降り、その力は十倍であったのを見た。」 Spalding and Magan, 5.

次回の記事でダニエル書第2章の考察を始めます。

「これは、第二の天使のメッセージに力を与えることになる真夜中の叫びであった。落胆している聖徒たちを奮い立たせ、彼らの前にある大いなる働きのために備えさせるために、天から天使が遣わされた。最も才能ある人々が最初にこのメッセージを受けたのではなかった。天使たちは謙遜で献身的な者たちのもとに遣わされ、彼らを促して『見よ、花婿が来られる。迎えに出よ!』という叫びを上げさせた。その叫びを託された者たちは急ぎ、聖霊の力によってそのメッセージを響かせ、落胆していた兄弟たちを奮い立たせた。この働きは人間の知恵や学識によるのではなく、神の力によるものであり、その叫びを聞いた神の聖徒たちはそれに抵抗することができなかった。最も霊的な者たちがまずこのメッセージを受け、かつてこの働きを導いていた者たちは最後になってこの叫びを受け入れ、『見よ、花婿が来られる。迎えに出よ!』という叫びをいっそう大きくする助けとなった。」『初期の著作』238頁。